

J A 自己改革推進レポート（J A 鳥取いなば） 10月号

1. 営農部がこども食堂へマスク寄贈

営農部は9月4日、鳥取市幸町の中央人権文化センターを訪れ、「こども食堂」へマスク600枚を贈呈した。

同センターの山根代表は「寄贈していただき、本当にありがたい。梨のロゴがかわいくて、子どもたちもきっと喜んでくれる。食堂の感染拡大防止に努めたい。」と感謝を述べた。

寄贈したマスクは全農ととりが製作したもので、旬の「梨」のロゴが入っており、J A 鳥取いなばの植田常務は、「オリジナリティーがあってかわいらしいデザイン。子どもたちには是非つけてもらいたい。」と話した。



2. 岩美南小学校の児童が「二十世紀」梨収穫体験

岩美支店は9月14日、食農教育の一環として岩美町立岩美南小学校3年生の児童16人を対象に同校敷地内の梨園で「二十世紀」梨の収穫体験を実施した。J A 担当職員や、連携教育の一環として県立岩美高校の生徒9人も参加し、一緒に収穫した。

児童は高校生と協力しながらコンテナ3個分の「二十世紀」梨を収穫し、「思った以上に大きくなっていてすごい。みんなで栽培した梨を収穫できて嬉しかった。早く食べたい」と笑顔で話した。



3. 星空舞の収穫がスタート

管内で、新ブランド米「星空舞」の収穫が始まった。今年度、生産者670人が約400㍓で「星空舞」を栽培している。

鳥取市の農事組合法人・良田生産組合でも「星空舞」の刈り取り作業を実施。同組合の小谷さんは「収穫を迎えほっとしている。鳥取県を代表するブランド米を目指し、生産者の所得増大につなげたい」と期待を寄せた。



4. 「輝太郎」初選果

9月30日、八頭町の広域果実選果場で早生甘柿「輝太郎」の初選果を行った。10月中旬にかけて出荷ピークを迎え、JA鳥取いなばでは“いなば柿シリーズ”としてリレー出荷に取り組む。

選果場には、濃いオレンジ色に色付いた「輝太郎」がコンテナ37ケース分持ち込まれた。今年には長梅雨や8月から9月の猛暑などの影響から生育状況が心配されたが、上々の仕上がりとなった。同JAでは、関東・関西・山陽の市場と直売で21,000ケース（3キロ箱）の出荷を計画し、3,600万円の販売を目指す。

